作物名

（ 2021 ）年 度 委 託　　（　稲　）

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名　紋枯病 ・ *Thanatephorus cucumeris*

試験場名　一般社団法人日本植物防疫協会　宮崎試験場　　担当者氏名　日植防　太郎

1. 試 験 目 的（依 頼 事 項）　防除効果及び薬害の検討

2. 試 験 方 法　試験地場所　宮崎県宮崎市大瀬町　一般農家水田

対 象 病 害 虫 発 生 状 況　多発生（接種）、8 月 23 日に初発生を確認。

耕種概要（品種・施肥・一般管理・露地栽培か施設栽培（ビニルハウス・雨除け・トンネルなど）の区別・土壌性条件・試験期間中の防除薬剤を記載）

品種：ヒノヒカリ　播種：2021年 6 月 9 日　移植：6 月 25 日　出穂期：8 月 29 日　刈り取り：10 月 10 日

育苗倍土：水稲用育苗床土（JA 供給）　栽植距離：条間 30cm×株間 18cm　移植箱数：約 20 枚/10a

元肥（ /10a）：普通期一発くん（16-16-16）40kg　土性：不明

試験期間中の防除：6 月 9 日 AAA 液剤

区制・面積・試験区の構成　1区 14.4 ㎡（3.0m×4.8m、16 条）　3 連制

1－Ⅰ	2－Ⅰ	3－Ⅰ	4－Ⅰ
4－Ⅱ	1－Ⅱ	2－Ⅱ	3－Ⅱ
3－Ⅲ	4－Ⅲ	1－Ⅲ	2－Ⅲ

1：ABC(展着剤) + A フロアブル　散布液 10L に 2ml を加用＋1500 倍

2：ABC(展着剤) + A フロアブル　散布液 10L に 10ml を加用＋1500 倍

3：A フロアブル　1500 倍　　4：無処理

Ⅰ、ⅡおよびⅢは連制を示す。

処理年月日,量,方法,処理時の作物ステージおよび処理前後の降雨の影響

（処理年月日）2021年 8 月 1 日および 8 日の計 2 回。

（作物のステージ）初回処理時、幼穂分化期、草丈 45～50 ㎝

（処理方法）　バッテリー式動力噴霧機にスズランノズルを装着し 10a 当たり 170L で散布した。

（処理前後の降雨）処理前後に降雨はなかった。

試験期間中の気象条件

末尾に記載

調査月日・方法（月日、詳細な方法、指数等を用いた場合は指数分類・式、薬害の判断方法・時期を記載）

（調査月日）薬効調査：2021年 8 月 30 日、9 月 9 日、18 日（出穂 20 日後）および 10 月 4 日（出穂 36 日後）

薬害調査：2021年 8 月 8 日（2 回目散布前）、30 日、9 月 9 日、18 日および 10 月 4 日

（調査方法）各区中央 100 株について、8 月 30 日、9 月 9 日は株元の発病の有無を調査した。9 月 18 日、10 月 4 日は羽柴式被害度の調査法に従い、第 3 葉以上に病斑がある株を発病株として発病株率を求めるとともに、発病株の中から無作為に選んだ 20 株の草丈および最上位病斑高を測定して病斑高率を求め、その平均値から次式によって発病株の被害度を換算し、さらに全体の被害度を算出した。全体の被害度より無処理に対する防除価を求めた。

病斑高率＝最上位病斑高÷発病株の草丈×100
発病株の被害度＝1.62×病斑高率 － 32.4
全体の被害度＝発病株の被害度×発病株率÷100

薬害は茎葉と穂を対象に、調査時に肉眼により観察し、薬害症状の有無を以下の内容で観察した。

－：薬害を認めない。 ＋：軽微な薬害症状を認める。 ＋＋：中程度の薬害症状を認める。 ＋＋＋：重度の薬害症状を認める。

その他（特記する事項があれば記載。接種または放虫した場合は、採集場所・時期・由来、月日、詳細な方法を記載）

6 月 19 日に試験水田より紋枯病菌核を含む代かき残渣を回収し、風乾後保管した。7 月 23 日（出穂 37 日前）に代かき残渣を 80L/10a の割合で試験区全面に散布した。

コメントの追加 [注1]: 学名の表記方法について
以下アドレス内(http://www.jppa.or.jp/test/shiken.html)の学名リストに代表的な学名を記載しています。ご活用下さい。

コメントの追加 [注2]: 土性の表記について
・壌土、砂壌土、砂土など。分からない場合は不明と記述。

コメントの追加 [注3]: 試験期間中の防除薬剤（殺菌又は殺虫剤）について
・使用月日、薬剤名を記載。試験開始前であっても試験に影響があると考えられるものは記述する。使用していない場合は「なし」と記載する。

コメントの追加 [注4]: 調査月日・調査方法について
・薬効と薬害の調査日が異なる場合はそれぞれ記載。
・調査月日と方法の項目を分けずにまとめても可。
・薬害は、いつ、どの部位について観察したかわかるように記述する。グレードは適宜定めてよい。

コメントの追加 [注5]: 特記事項、接種について
・接種した場合はここに記載。病原菌の由来や接種方法（接種量や箇所、薬剤処理との時間的関係）を記載

作物名

（ 2021 ）年 度 委 託　　（　稲　）

対 象 病 害 虫 名 ・ 学 名　紋枯病 ・ *T. cucumeris*　　一般社団法人日本植物防疫協会宮崎試験場

3. 試 験 成 績

薬効調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査株数	8月30日 発病株率(%)	9月9日 発病株率(%)	9月18日(出穂20日後) 発病株率(%)	病斑高率(%)	発病株の被害度	全体の被害度	10月4日(出穂36日後) 発病株率(%)	病斑高率(%)	発病株の被害度	全体の被害度
3） ABC(展着剤) 既知化合物 24% Lot No.***** ＋ Aフロアブル 既知化合物 30% Lot No.*****	散布液10Lに2mlを加用＋1500倍	Ⅰ	100	0	0	0	0	0	0	1.0	39.1	29.3	0.3
		Ⅱ	100	0	0	0	0	0	0	2.0	51.3	50.7	1.0
		Ⅲ	100	0	0	0	0	0	0	2.0	70.5	81.8	1.6
		平均（防除価）		0	0	0		0	0（100）	1.7		53.9	1.0（96.5）
	散布液10Lに10mlを加用＋1500倍	Ⅰ	100	0	0	0	0	0	0	1.0	60.0	64.8	0.6
		Ⅱ	100	0	1.0	1.0	70.0	81.0	0.8	5.0	61.2	66.7	3.3
		Ⅲ	100	0	0	1.0	70.0	81.0	0.8	1.0	71.0	82.6	0.8
		平均（防除価）		0	0.3	0.7		54.0	0.5（98.4）	2.3		71.4	1.6（96.0）
対） Aフロアブル 既知化合物 30%	1500倍	Ⅰ	100	0	0	1.0	57.1	60.1	0.6	1.0	70.0	81.0	0.8
		Ⅱ	100	0	0	2.0	51.3	50.7	1.0	4.0	59.4	63.8	2.6
		Ⅲ	100	0	0	5.0	59.1	63.3	3.2	11.0	62.9	69.5	7.6
		平均（防除価）		0	0	2.7		58.0	1.6（94.9）	5.3		71.4	3.7（91.0）
無処理		Ⅰ	100	19.0	50.0	61.0	62.7	69.2	42.2	60.0	65.2	73.2	43.9
		Ⅱ	100	5.0	12.0	16.0	60.5	65.6	10.5	32.0	62.1	68.2	21.8
		Ⅲ	100	11.0	35.0	58.0	63.6	70.6	40.9	69.0	69.0	79.4	54.8
		平均（防除価）		11.7	32.3	45.0		68.5	31.2	53.7		73.6	40.2

薬害調査

供試薬剤	処理方法	連制	調査月日 8月8日	8月30日	9月9日	9月18日	10月4日
3） ABC(展着剤) ＋ Aフロアブル	散布液10Lに2mlを加用＋1500倍	Ⅰ	－	－	－	－	－
		Ⅱ	－	－	－	－	－
		Ⅲ	－	－	－	－	－
	散布液10Lに10mlを加用＋1500倍	Ⅰ	－	－	－	－	－
		Ⅱ	－	－	－	－	－
		Ⅲ	－	－	－	－	－
対） Aフロアブル	1500倍	Ⅰ	－	－	－	－	－
		Ⅱ	－	－	－	－	－
		Ⅲ	－	－	－	－	－

コメントの追加 [注6]: 試験成績について

・結果を表形式で記載。

・連制ごとまたは調査地点ごとに結果を表示し、合計値または平均値を表示する。

・評価に用いた数値（発病指数、発病率および防除価等）も記載する。

・薬害は調査時期がわかるように表記。

・2021 年度より表中の無処理区の薬害記号は記載不要となりました。

紙面のスペースによっては“後述”と記載し、表を末尾に記載しても可。

4. 考 察

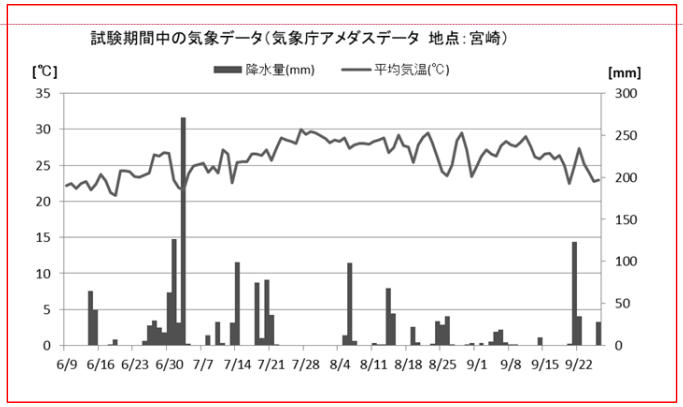
例年紋枯病が発生する圃場で試験を実施したが、均一な発病を促す目的で 7 月 23 日に接種を行った。無発生の 8 月 1 日に処理を行い、8 月 23 日に初発生を確認した。その後も病勢は徐々に進展し、無処理区では 9 月 18 日（出穂 20 日後）の調査で発病株率 45.0%、全体被害度 31.2 で、10 月 4 日（出穂 36 日後）の調査ではさらに進展し発病株率 53.7%、全体被害度 40.2 と多発生条件の試験となった。対照薬剤の A フロアブルは高い防除効果を示した。

3） ABC（展着剤） 散布液 10L に 2ml 加用、散布液 10L に 10ml 加用

本剤の散布液 10L に 2ml 加用処理および散布液 10L に 10ml 加用処理は、対照処理と比較して両濃度ともにほぼ同等の効果を示し、無処理と比較して効果は高かった。濃度間に顕著な効果の差異は認められなかった。

また、稲（品種：ヒノヒカリ）に対する薬害および汚れは両濃度ともに認められなかった。

よって、本剤加用による悪影響は両濃度ともに認められなかった。



コメントの追加 [注7]: 考察について
・展着剤試験の判定は、加用による悪影響の有無を記載して下さい。

コメントの追加 [注8]: 気象条件について
・試験開始から最終調査日までの平均気温、降水量を表またはグラフで示す。
・データの引用元を付記する。